

## 視点(1645)

(思考と研究の概念編)

### 20世紀と21世紀の概念的相違!!

21世紀になって、はや12年が経過しました。いまさら21世紀論と言う人がいますが、私は21世紀(2001年より)になって12年経過して始めて「20世紀とは何だったのか?」「21世紀は何なのか?」が見えてきました。21世紀の概念が今頃見えてきたのでは遅いのではないかという考え方もありますが、1970~1980年代(21世紀の20~30年前)に21世紀論が多く分野で未来志向の概念「21世紀型(21世紀スタイル)」が言われましたが、実は今から考えれば「すべて間違い」でした。

我々は21世紀を「素晴らしい未来志向の時代」としてとらえていました。つまり、我々が1970年~1980年代に思い描いたのは「過去より現在、現在より未来はより豊かな時代になる」ということを前提した21世紀の概念論でした。

今、21世紀になって、政治・経済・社会・文化・商業等の面において、20世紀と21世紀は20世紀の延長線上の概念で論じることができなくなりつつあり、**20世紀の概念と21世紀の概念は「断絶」があることが少しづつわかってきました**。同時に、21世紀の概念が見え始めると20世紀の概念も鮮明になってきました。

近代文明がイタリアのルネッサンス(文明開花)によって始まりました。その後、先進国は1700年代の半ばから産業革命が始まり、大量生産・大量消費・大量消費による、過去より現在、現在より未来が豊かになるという社会構造が250年間続きました。それゆえに、我々は21世紀になる前の段階で、21世紀の概念を間違ってしまったのです。我々先進国が豊かになることの連続性の中で生活できたのは、「広義のモノの豊かさ」であり、我々の生活はモノによって豊かになりました。しかし、大量生産と大量消費の経済システムは「帝国主義戦争」(大量生産された“モノ”のマーケットの争奪戦)や「労使紛争」(資本家と労働者による富の分配争奪戦)や「地球環境の破壊」(人間のエゴと自然との争奪戦)等が起こり、20世紀は「7割は正しいが3割は間違っている」という社会でした。しかし、21世紀になって先進国は「モノ離れ」が起こり、モノの豊かさは享受した上での次元の異なる“豊かさ(精神的豊かさ)”を求めるようになり、この精神的豊かさは決して、従来のGDPで算定される経済システムではありません。

我々が20世紀型とか21世紀型というのは、過去の延長線上でより完成度を高くすることではなく、20世紀の社会現象と21世紀の社会現象に「進化」(適応)させることにより20世紀型の概念と21世紀型の概念が創造されます。それゆえに社会現象の変化に対応することで1世紀単位の異なった概念が形成されます(六車流:マーケティング理論)。

ダーウィンは進化論の中で「強いものが生き残るのではなく変化に適応したものが生き残る」と言っています。20世紀スタイル(正式には18世紀から20世紀の250年)は、20世紀の社会現象(産業革命以降の大量生産、大量販売、大量消費による技術革新を背景にした社会現象)、21世紀スタイルは21世紀の社会現象(20世紀とは次元の異なる概念を背景にした社会現象)の変化に対応することによりあらゆる分野の概念は進化(変化に適応)します。それゆえに、メガトレンド(大潮流)が起こる場合は、社会現象そのものが変化しますので、前世紀と現世紀は全く断絶した異なる概念の社会となります。

ただ、私は進化にも**小進化と大進化**の2つのタイプがあることを「38億年生物進化の旅」(池田清彦著・新潮社)で学びました。

生物(動物や植物)は、体自体が1つのシステムによって成り立っています。ダーウィンの進化論は小進化であり、システムの枠内の多様化であり、大変革が起こるとシステムの枠内の多様化では対応できません。それゆえ、システム全体を変化(大進化)させないと1つの生物は滅亡してしまいます。まさに20世紀スタイル中(250年間)の進化は「小進化」であり、20世紀から21世紀になる時の進化は20世紀から見ると「大進化」であり、過去の延長線上の進化ではありません。また、遺伝子的には多様化により複雑化した多細胞より単細胞の方が機敏に変化に対応できます。それゆえに、「小進化である戦術」のみでなく「大進化の戦略」の手法を導入しないと大進化の段階である21世紀に勝ち残ることはできません。

(株)ダイナミックマーケティング社<sup>+</sup><sup>6</sup>

代表 六車秀之